

須影八幡宮を知る

～併せて別当蓮華寺を知ろう～

間仁田 勝

はじめに

7月末日、羽生市須影の須影八幡宮で夏越の祓いが行われました。

大鳥居の下に設けられた輪を8の字状に「蘇民将来（そみんしょうらい）」と唱えながら三度くぐると、無病息災、家内安全にご利益があるといわれております。

一年の前半の最終日にあたる6月30日（旧暦）に行われる大祓いの神事「夏越（なごし）の祓」は神社の鳥居や拝殿前などに茅（ちがや）や藁で作った大きな輪を設け、「茅の輪くぐり」を行い、一年の前半の罪や穢れを祓い、残りの半年間の無病息災を祈る行事であるといわれています。

こんな伝承があります。

その昔、疲れ果てた須佐之男命は、兄弟が住む家を見つけ、一晩の宿を頼むこととしました。まず、金持ちの弟の巨旦将来（こたんしょうらい）の住む家に頼んだところ、冷たく断られてしまいました。次に貧乏な兄の蘇民将来の住む家に頼んだところ、歓待し、栗ご飯を馳走してくれました。須佐之男命はこ

れを大変喜び、再び訪れた時、蘇民将来の娘に茅の輪の護符を腰につけるように話しました。そして須佐之男命はさらに「今後も蘇民将来の子孫と言って茅の輪を着けていれば、疫病を免れるであろう」と告げ、去っていきました。

私たちの祖先は、日本列島を生活の場を選んだことから、自然の山河の恵みに数多くの恩恵を受けるとともに、厳しい自然環境、度重なる災害の苦難にもあってきました。

こうした苦難を克服するため互いに助け合い、各地域において農耕の共同社会が形成され、その心の拠り所として神社が生まれました。

目 次

はじめに

第1章 神社の歴史的経緯

1 神社の発生	7
2 別当寺の新設	8
3 神仏分離令を發布	9
4 社格制度を布告	9
5 政教分離となる	11

第2章 八幡宮（八幡信仰）の普及

1 八幡信仰の成立	12
2 宇佐神宮の建立	12
3 手向山八幡宮の建立	14
4 石清水八幡宮の建立	15
5 鶴ヶ岡八幡宮の建立	15
6 守護・地頭による普及	16

第3章 須影八幡宮の建立

1 須影集落の発生	17
2 鎮守としての古社の創建	18
3 源頼朝旗掛けの松	18
須影八幡宮大松との別れ	20
4 鎌倉武士葛浜四郎行平	21
葛浜郷	22
5 須影の古社に八幡神を勧請	23

第4章 蓮華寺建立前記（浄慶寺・多門寺）

- 1 小磯家文書（小磯権左衛門覚書） 24
- 2 須影村に浄慶寺があった 25
- 3 多門寺もあった 27

第5章 神仏混交による須影八幡宮の発展

- 1 須影八幡宮の別当寺として蓮華寺が建立される
 - （1）荒廃寺である須影多門寺の再興建立か 28
 - （2）蓮華寺の開基は誰か 29
- 2 蓮華寺門徒寺として東曜寺を建立 30
- 3 須影八幡宮・蓮華寺、御朱印を賜わる 30
- 4 蓮華寺門徒寺として善生院を建立 32
- 5 蓮華寺、真言宗智山派智積院の末寺となる 32
- 6 八幡宮社殿を再建、併せて阿弥陀堂を建立 33
- 7 社殿が再び再建される（安政5年）
 - （1）拝殿の再建と幣殿・向拝の新造 33
 - 須影八幡宮棟司 三村若狭正利 34
 - （2）壁面彫刻 35
 - 壁画の修復 35
 - 【八幡宮地形搗き】 37
 - 【須佐之男命の八岐大蛇退治縁起】 37
 - 【神功皇后の三韓征伐縁起】 39
 - 【八人の福神】 40
 - （3）拝殿天井図「花鳥図」 42
- 8 蓮華寺の廃寺と八幡宮の独立
 - （1）蓮華寺廃寺となる 43

(2) 蓮華寺・八幡宮の境内地等処分状況	44
旧泉県士族屋代義雄	45
(3) 蓮華寺廃寺後の本尊等の行方	
① 東曜寺本尊地藏菩薩像	45
② 善生院本尊薬師如来像	46
③ 東曜寺観音堂本尊千手観音像	47
④ 蓮華寺本尊等	48
⑤ 大河内金兵衛久綱の位牌	48
大河内金兵衛久綱	48
(4) 蓮華寺歴代住職とその事績	
① 歴代住職	49
② 歴代住職の事績	50
須影共同墓地内住職墓所配置図	51
第5章 明治以降の須影八幡宮	
1 蓮華寺の廃寺と須影八幡宮の独立	52
2 上地令による境内地の減少	53
3 八幡宮境内地の復帰	54
4 神社の合祀	54
第6章 現在の須影八幡宮	
1 祭神	56
2 ご神体	57
3 八幡宮の貴重な社物	57
4 参道施設	61
5 主な境内社	63
6 主な境内記念碑等	65

第8章 須影八幡宮・蓮華寺に関連する施設

1	旧蓮華寺墓所（須影共同墓地）	67
2	武蔵川大治郎墓碑	68
3	愛宕神社	69
4	白山神社	70
5	須影富士塚	70

おわりに

主な参考文献



須影八幡宮

第1章 神社の歴史的経緯

1 神社の発生

人々は、五穀豊穡や自然の恵みを祈り、感謝する場として社（やしろ）を設けた。

まず、神様に来ていただくための施設として誘導施設である幟を設置するとともに高木を植栽し、鎮座する場所として屋代（社）、御屋（宮）、神庫（祠）を設け、祈るための場として拝所を設けた。そして、社には、神が鎮座する場所として、神の象徴である鏡、玉、幣束等を安置した。

神が鎮座する本殿、人々が拝礼をする拝殿、その両社を繋ぐ幣殿、そして拝殿にのぼることなく拝礼できる向拝である。

神々の多くは、もともと農耕神としての性格が強かったが、次第に、個人祈願の受け皿となり、庶民信仰へと広がりを持つようになった。



人々は、生活の安泰を求め、古社である本社から神霊を分祀し、新たに、神社を建立し、氏神としていった。

身近に鎮座している神社をみると、八幡神社、神明神社、天神社、稲荷神社、愛宕神社、八坂神社、厳島神社等、様々な神社があることがわかる。

2 別当寺の新設

奈良時代になると、次第に日本固有の神と仏教信仰とを折衷して融合調和を図る神仏習合思想が広まり、古来からの神社に付随して、その境内に寺院が設置されるようになっていった。

いわゆる神宮寺である。

それにより、本来は仏で、仮の姿として神となって現れる権現信仰など、本地垂迹思想が普及していった。

天照大御神が大日如来、八幡神が阿弥陀如来、須佐之男命が午頭天王等である。

寛永14年(1637)、島原の乱が勃発、翌年平定されたが、幕府は、キリシタン禁制のため、寺院から檀徒の宗門人別帳を強制的に提出させる宗門改めを実施した。これにより、国民全員がいずれかの寺に属さなければならなくなった。

しかしながら、各集落とも、心の拠り所としての神社は勧請していたものの、寺院を持たない村が多かったことから、急遽、荒廃していた寺を再興させたり、神社に付随して別当寺を新設したりして対応することとなった。

特に、島原の乱を平定した松平信綱が忍城主となったことから、羽生・加須・行田・熊谷地域の宗門改めは厳しく励行されたといわれている。

その後、幕府はそれらの寺院に朱印状を交付して寺院の安泰を図るとともに格の向上に努めたことから、次第に、寺院の僧職は神社の神職より上位に立ち、神社を配下に置くようになっていった。須影村の菩提寺であった蓮華寺も、須影八幡宮の別当寺として建立されている。

3 神仏分離令を發布

江戸幕府が崩壊し、大政奉還が行われた翌慶応4年(1868)3月、明治政府は、神道国教化をめざす一連の政策として、神仏分離令を發布し、神道を仏教から独立させた。

神仏分離令の主な内容は次の通りである。

ア 神社では仏像を神体としてはならない。

イ 寺院が神社の祭祀に関与してはならない。

ウ 神社管理者となっていた別当、社僧は廃し、神主・社人とする。

エ 神社において、権現・菩薩・牛頭天王等の仏教名称は廃止する。

それにより、八幡大菩薩は八幡大神に、牛頭天王社は八坂神社に、そして山王大権現社は日枝神社にと代わっていった。

なお、明治20年に「権現」の名称は許可となっている。

この神仏分離令は、廃物稀釈と誤解され、各地で仏像の破壊が起きるとともに、寺院が廃止されていった。

須影地区においても、須影村の蓮華寺、東曜寺、善生院が廃寺となるとともに、加羽ヶ崎村の寶光院、秀安村の長泉寺が廃寺となっている。

4 社格制度を布告

神社にも多くの呼び方がある。

神宮、大社、式内社、一の宮、総社等である。

神宮は、歴史的にみると、明治以前では、伊勢神宮等、一部の神社のみに与えられた社名であったが、明治以降になると、

皇室の祖先神や皇室に功績のあった特定の神を祭神とする神社の一部が、国の勅許のもと、「神宮」と名乗るようになっていった。また、戦後においては、宗教法人となった神社本庁から特別に認められた神社が神宮を社号としている。

大社は、霊威が高く地域の中心となる神社のことで、かつては大社といえば出雲大社のことであったが、社格制度により官幣大社となった神社が制度廃止後もそのまま名乗っている場合が多く残っている。

式内社とは、平安中期の延喜式神名帳に登録された神社である。氷川神社、金鑽神社等がある。

一の宮とは、新任国司が最初に参拝する神社をいい、その国の最高位の神社が選ばれた。武蔵国では、氷川神社（さいたま市）が一の宮となっている。

総社は、一国内の諸社の祭神を合わせ祀った神社で、国府が置かれているところに置かれた。武蔵国では大国魂神社（府中市）が総社となっている。大国魂神社は、景光天皇 41 年(111)に創建され、境内に、その当時の一之宮から六之宮までの六社を祀っていることから「六所宮」とも呼ばれている。ちなみにその六所宮とは、一之宮が小野神社（多摩市）、二之宮が二宮神社（あきるの市）、三之宮が氷川神社（さいたま市）、四之宮が秩父神社（秩父市）、五之宮が金鑽神社（神川町）、そして六之宮が杉山神社（横浜市）で、現在の一の宮（氷川神社）、二の宮（金鑽神社）とは異なっている。

明治 4 年(1871)、社格制度が布告され、従来からの大社、中社、小社、式内社などは廃止され、官社、官幣社、国幣社等にか

わっていった。

官社とは、幣束を宮内省等から授与される神社である。

官幣社とは、神祇官から幣帛を捧げられた神社で、大社、中社、小社・別社との四等級がある。

国幣社は、官幣社に次ぐ社格の神社で、例大祭には国より幣帛料が拱進される。大社、中社、小社に分類されている。

それ以外に、府県社、郷社、村社があり、他は無格社である。

明治初期、明治政府は社寺を統制する教部省を設置したが、明治 10 年(1877)に、その教部省を廃止、内務省に包含し、内務省社寺局とした。そして明治 33 年、「神社は国家の宗祀」の基本方針のもと、内務省社寺局を、国家神道を管理する神社局と教派神道など、仏教を含めた国家神道以外を管理する宗教局に改組した。さらに、昭和 15 年(1940)には、神社局を内務省の外局としての神祇院に昇格させている。

5 政教分離となる

昭和 20 年(1945)の太平洋戦争の終結により、日本は、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）に占領され、その統治のもと、

「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」、いわゆる神道指令を發布し、国家神道を廃するとともに神祇院を廃止した。それに伴い、神社における社格制度も廃止となった。

昭和 21 年には、かつての神祇院を母体とした宗教法人としての神社本庁（本社：伊勢神宮）が発足している。

第2章 八幡信仰の普及

1 八幡信仰の成立

神社でとびぬけた数を示している八幡神社、その八幡信仰の発展形態を追ってみた。

八幡信仰は、九州の宇佐神宮を発祥地として、奈良の手向山八幡宮、そして京都の石清水八幡宮と、天皇崇拝のもと、平城京、平安京の守護神として祀られたのが最初で、鎌倉時代になり、源頼朝により、鎌倉に鶴ヶ岡八幡宮が勧請されてからは、源氏の守り神として、次いでは武士の守り神として、全国に配置された守護・地頭に任命された武士たちによって全国各地に勧請されていった。

「八幡」とは、船に多くの大漁旗が立てられる様を表す言葉で、海の神様「八幡神」として、九州大分の宇佐氏により祀られた産土（うぶすな）社から始まる。

2 宇佐神宮の建立（大分県宇佐市）

西暦 527 年、筑紫国磐井が朝廷に反乱を起こし、宇佐国造であった宇佐氏は磐井に味方し敗れた。代わって着任したのが辛嶋氏であった。

一方、筑紫をはじめとする北九州の多くの地域では、西暦 4 世紀に新羅征討を行った神功皇后とその子の筑紫で誕生した誉田別命（ほんだわけのみこと）を崇拝していた。

蘇我馬子は、宇佐の支配を強化するため、大和国の大輪（おおみわ）神社の神主であった大神比義を宇佐に送り込んでいる。

和銅5年(713)、朝廷は神祇令を発し、宇佐にも国家祭祀の神社を設けることとした。

祭神を定めるにあたり、大神氏は、地元で崇拜されている誉田別命を推し、辛嶋氏は、漁師の象徴である八幡（やはた）神を推した。

この争いに仲裁に入ったのが隠棲していた宇佐氏で、誉田別命を八



宇佐神宮

幡神に付与した新たな「八幡大神（八幡大明神）」を設け、その「八幡大神」を新たに建立された宇佐八幡宮の祭神とした。

平安時代に著された『扶桑略記』の欽明天皇の項に「八幡大明神筑紫に顕れる。（中略）和雅名は護国靈驗威身神大自在菩薩と云う。国々所々に神明に垂迹し、初めて顕れ坐すのみと。一に曰く。八幡大菩薩は初め豊前国宇佐郡馬城岑に顕れ、其の後菱形小倉山に移ると今の宇佐宮是なり」とあるように、祭神が八幡大菩薩と代わっていった。

宇佐神宮は、八幡信仰のもと、設置された神社で、全国の八幡宮の総本社である。

現在は、八幡大神、比売大神、神功皇后の三神を祭っている。

欽明天皇の571年に八幡大神（応神天皇の神霊）が宇佐の地に示顕、神亀2年(725)に聖武天皇の勅願により、現在の宇佐市御許山の地に社を創設したとある。

3 手向山八幡宮の建立（奈良県奈良市）

『続日本記』に、聖武天皇は総国分寺として東大寺を建立し、大仏を鑄造する時、八幡大神の神教を受け、その神助を得て完成した。天皇は、天平勝宝元年(749)に八幡大神を梨原の宮に祀ったとある。

朝廷は、九州支配に際し、宇佐氏の力を借りるとともに、東大寺建立においても力を借りたことから、聖武天皇の命により天平勝宝元年、東大寺の鎮守として、宇佐八幡宮から八幡大神を勧請し、平城京に八幡宮を創設した。

『東大寺要録』に、「天応の初頃に靈驗威力神通大自在王菩薩のお告げを賜わり、この神を祀る」とある。

その後、八幡大神は、東大寺の守護神ということから、仏教と習合され、八幡大菩薩と変化していった。

当初は梨原宮（奈良市役所近辺）にあったが、その後の建長2年(1250)に現在の手向山の地に鎮座した。

明治初年の神仏分離令により、祭神の八幡神座像(国宝)は東大寺八幡殿に移され、現在は、誉田別命、比売大神、仲哀天皇、神功皇后、仁徳天皇の五神を祭神としている。



手向山八幡宮

東大寺から春日山に向かう沿道に、ひっそりと鎮座している。

4 石清水八幡宮の建立（京都府八幡市）

平安京へ遷都後においても、平城京を守護していた手向山八幡宮に代わる平安京を守護する八幡宮として、貞観2年(860)に清和天皇の命により、宇佐八幡宮から勧請し、八幡大菩薩を祭る石清水八幡宮が創建された。

歴代朝廷の崇敬熱く、特に清和天皇の建立であることから清和源氏の氏神とされた。また、源氏の頭領である源義家が、この石清水八幡宮で元服し「源八幡太郎義家」と名乗ったことから、武勇の神としても崇拝されるようになった。

石清水八幡宮は、平安京の裏鬼門(南西)にあたる京都府八幡市の男山(標高 143 メートル)に鎮座しており、八幡大神(誉田別命、比売大神、神功皇后)を祭神としている。



石清水八幡宮

5 鶴ヶ岡八幡宮の建立（神奈川県鎌倉市）

永承6年(1051)に前九年の役で戦勝を祈願した石清水八幡宮を、源頼義・義家親子により鎌倉の由比郷鶴岡(材木座)に鶴岡若宮として勧請し、八幡大菩薩を祀ったのが始まりである。

治承4年(1180)に兵を起こした源頼朝は、鎌倉に入ると、「祖宗を崇めんがため」と小林郷松岡の地に、その社(若宮八幡社)

を遷した。

頼朝は、その後の建久 2 年(1191)に、若宮八幡社の社殿が焼失したことから、裏山の中腹を切り開いて、本社を造営、改めて石清水八幡宮から神霊を迎え、鶴ヶ岡八幡宮とした。

現在の祭神は、応神天皇、比売神、神功皇后である。

八幡宮の神使が鳩であることから、八幡宮には一般的に「鳩八幡」の額が掲げられていることが多い。

須影八幡宮の「一の鳥居」の額も鳩八幡となっている。



鶴ヶ岡八幡宮

6 守護・地頭による普及

文治元年(1185)、後白河法皇は、源頼朝の代理として上洛した北条時政の圧力に屈し、源頼朝を、源義経追討のための「日本国惣追捕使」に任命するとともに、「日本国惣地頭」に任じ、全国の荘園・国衙領の土地の支配とそれらを知行する官人を支配する権限を認めた。頼朝は、それらを機に、全国の荘園・国衙領に追捕使（のちの守護）及び地頭を配置した。配置された追捕使・地頭たちは、こぞって武神としての八幡大菩薩を鶴岡八幡宮から分祀し、新たに八幡神社を創建していった。

この文治元年が鎌倉時代の始まりと言われている。

第3章 須影八幡宮の建立

1 須影集落の発生

関東平野には、往古より、地盤が沈下する関東造盆地運動という地殻変動があり、その影響は今でも続いているという。

その中心地が加須であるところから、それらにより造られた低地を加須低地と呼び、羽生もその加須低地に属している。

利根川もはじめは、今の荒川筋を流れていたが、次第に東移し、今の会の川筋に流れを変えていった。

会の川筋に流れた水流は、砂山村の地からは、関東造盆地運動によって沖積台地が埋没して形成された加須低地に、幾筋かの流れを変え乱流していった。

そんな加須低地も、暴れ川である利根川の乱流により、次第に平坦な氾濫原となっていくた。

さらに、乱流した利根川は、平坦地となった氾濫原に、河道に沿って、長い年月を経て、微高地である自然堤防を形成していった。堆積物は、砂が主で、排水が良く高燥なため、集落が立地し、畑や樹園として利用されていった。その自然堤防に榛名山や浅間山の火山灰などに由来する大量の砂が季節風によって吹き溜められた内陸性の砂丘、いわゆる河畔砂丘が、旧河道沿いに転々造られていった。

須影地内の河畔砂丘跡（自然堤防跡）からみると、大きく3つの流れがあったことが分かる。

- ① 砂山から東北の方向に左折し、加羽ヶ崎、秀安、下羽生から北袋まで延びている河畔砂丘からみられる流

れ、いわゆる現在の御嶽用水路筋を流れていた時の旧利根川。

② 砂山から、須影、下手子林を経て中手子林に達し、東に折れ、槐川の自然堤防に接続する河畔砂丘からみられる流れ、いわゆる現在の手子堀用水路筋を流れていた時の旧利根川。

③ 現会の川沿いの河畔砂丘からみられる旧利根川。

2 鎮守としての古社の創建

『新編武蔵風土記稿』に「渡川 昔会の川ここにかかりし頃の渡船場蹟故名ありと云」とある。

かつて、利根川が今の手子堀用水路筋を流れていたおり、そこに渡船場があり、集落があったと思われる。

村人たちは、その渡船場及び渡り川集落、いわゆる須影集落の守り神（鎮守）として、この地に社を創建したのではなかろうか。

現在の須影八幡宮の前身である古社の創建である。

3 源頼朝旗掛けの松

かつて、須影八幡宮境内に「頼朝旗掛けの松」と伝承されていた大松があった。

源頼朝が奥州征伐の途中、軍を休ませ、この社に戦勝を誓った折に、旗を掛けたと言われている。

源頼朝の弟・義経が頼朝と対立して逃亡、奥州藤原氏にかくまわれていたことから、頼朝は、文治5年(1189)7月19日に奥州

藤原氏を攻めるため、鎌倉を発ち、7月25日に現在の宇都宮市下河原町付近にあった「古多橋駅」という宿場に到着、そして宇都宮の二荒山神社に参拝、戦勝を祈願している。

これらから勘案すると、その途中、須影村に寄ったとすれば、その間の文治5年7月19日から25日の間となる。

この伝承を信じれば、文治5年には、神社が存在していたとともに、源頼朝をこの神社に誘導した有力者がこの近在にいたものと思える。

この松は、明治34年の資料によると、高さ30メートル、幹回5.40メートルあったとある。

この須影地区の宝であり、誇りでもあった大松が、なんとも残念なことに松くい虫に侵されて、昭和60年(1985)の冬頃から、次第に緑を失い、ついに枯損してしまい、昭和61年6月13日、惜しくも伐採されてしまった。

その折の切り株をみると310年の年輪が刻まれており、江戸時代前期の延宝年間(1673-81)の植栽となる。

加須市町屋新田の鶴塚古墳上に植えられていた大松が、昭和56年(1981)に伐採され、その折、年輪を数えたところ、380年まで数えられたといわれている。

これらから、この地域の松の寿命は、300～400年と思える。

当時において頼朝が旗を掛けられる程の大きさがあったこと等から換算すると、頼朝が旗を掛けた松を初代と数えれば、伐採された樹は三代目となる。

蛭間春夫氏から小磯喜伝治氏が撮影した伐採時の写真をいただいたので、その一部を掲載したい。

須影八幡宮大松とお別れ

昭和 61 年 6 月 13 日伐採



大松枯れる



伐り倒される



八幡宮に別れを告げる



上尾市に引き取られていく

小磯氏のその折の一句：大松の消えて空虚や夏木立

撮影：小磯喜伝治氏

伐採された大松の切り株は、須影八幡宮の拝殿内、及び羽生市立図書館の常設展示コーナーに展示されている。

その図書館の説明板には、こう書かれている。

「このクロマツは羽生市須影の八幡神社の御神木で、羽生市指定の天然記念物でした。クロマツはアカマツとちがい、水を好む木で内陸でこのように大きく成長したのは珍しいことです。昔利根川があちこちに流れを変えていた頃、水分が十分吸収できたためと思われます。伐り倒す前は樹木の赤さは 30m もありました。ご神木として保護が行き届いていたためでしょう。年輪を数える 310 ありますから、今から 310 年も前に植えられたことになります。マツクイムシに侵され、昭和 61 年 6 月 18 日惜しくも伐り倒されてしまいました。貴重な資料として展示いたします。」

310 年の歴史を知ることができる貴重な史料で、いつまでも大切にしたい文化財です。

4 鎌倉武士葛浜四郎行平

『新編武蔵風土記稿』に「神戸村は葛浜郷に属す、古へ神戸三郎といひし者、爰に住せしをもて村の名とすと傳へ、且後年その霊を崇めて村内に祀るなどを云へど據なし、思ふにただ往古此所神社の領なりし故をもて、名づけ者なるべし、(中略) 神戸明神社 當社は神戸三郎の霊をまつりしと云傳ふ」とあり、また、千眼寺の項に、「當寺は中古一旦廢せしを、たまたま村内萬藏院と云も廢寺となりし故に、寺を合わせて乗良なるもの一寺を再興すと云、されば當寺の院号は彼萬藏院の名を用ひしなり、乗良

は承應元年寂す、中興開山日咩寂年詳ならず又萬藏院は古へ神戸三郎が妻、薙染して如意坊といひ、三郎追討福の為に造立せし寺なりと、口碑に残れり」と記されている。

室町時代には、羽生市の西部地域及び加須市の一部は、葛浜郷と呼ばれていた。

その葛浜郷に、室町時代末期、大河戸下総権守行方（重行）の四男である四郎行平が居し、「葛浜」を姓としたという。

葛浜四郎行平は、『吾妻鏡』によると、治承5年(1181)に他の3人の兄とともに、源頼朝に仕えたとある。

かつて神戸には萬藏院という寺院があり、神戸三郎の妻が亡夫の菩提を弔うために建立したと伝わる。

この神戸三郎は、行平と同一人物とされる。

萬藏院は近隣の千眼寺とともに廃寺となり、後世に両者を合わせて新たに千眼寺として復興された。

そして、四郎行平が居したのは葛浜郷の今の神戸の地と伝わっており、その館跡と言われるところが、今でも羽生市神戸に伝わっている。

神戸神社の石碑に「左衛門佐平重行」と刻されている。

左衛門佐平重行の子が葛浜四郎行平である。行平の居したのは葛浜郷神戸と思われる。諏訪神社のあるあたりではと思う。

【葛浜郷】

『新編武蔵風土記稿』及び『角川日本地名大辞典』によると、葛浜郷に属した村は、

船越・樋遣川・不動岡・多門寺・下羽生・秀安・加羽ヶ崎・

上川崎・中川崎・下川崎・砂山・北袋・上岩瀬・中岩瀬・
下岩瀬・桑崎・神戸・上大越・中大越・下大越・寺ヶ谷戸・
今泉・発戸・尾崎・上藤井・下藤井・稲子・簗沢・本川俣・
上川俣・広川・上常木・下常木・名・堤

の 35 か村とある。

5 須影の古社に八幡神を勧請

源頼朝は、文治 5 年(1189)7 月 19 日に奥州藤原氏を攻めるため、畠山重忠を先陣として一千騎を率いて鎌倉を発ち、鎌倉街道中道（なかつみち）を通り、小川口（現在の川口）で入間川（現荒川）を、高野（万願寺橋付近）で利根川を、そして古我（古河）で渡良瀬川を、それぞれ渡り、7 月 25 日に宇都宮に着いている。

前出の通り、須影村に寄ったとすれば、高野の渡しの前後に脇道にそれ、頼朝一行を須影村の古社に誘導したものと思える。では、源頼朝を須影の古社へ誘導したのは誰か。

治承 5 年(1181)に頼朝に御家人として仕え、須影村産土社に近い神戸村に館を構えていた葛原四郎行平と思われる。

頼朝は、この産土社の境内で休憩し、戦勝祈願後、古河へ向かっていったと思える。

葛原四郎行平は、頼朝の来社を機会に、頼朝の御家人たちが、全国に守護及び地頭として派遣され、その地に八幡大菩薩を勧請したように、行平もまた、鶴ヶ岡八幡宮から八幡大菩薩を勧請したものと考えられる。

爾来、須影の古社は、八幡大菩薩を祭神とする須影八幡宮となったのではないだろうか。

第4章 蓮華寺建立前記（浄慶寺・多門寺）

1 小礪家文書（小礪権左衛門覚書）

須影の小礪家に次のような文書が残っている。

「当領須影村菩提寺之義ハ足利天下之頃ハ上藤井村源長寺旦那
与申伝ヘアリ、又当村ニ而、多門寺与申寺有之正能村竜花院末寺
与伝ヘアリ、其後于寛永ニ至リ蓮花寺ヲ建立、本山ハ高野山竜光
院ト申伝フ、後チ五世了恵法印之代、京都智積院末寺トル由、月
光山清浄院蓮花寺ハ徳川三代之將軍家光公ヨリ御朱印地拾九石
五斗余被下置候、明治三庚午且中願ニヨリ廢寺被付候、寛政年間
より明治三午年迄陸奥国泉之城主御高貳万石本多越中守御領分
ニ有之候、能登守次兵庫之助ニ而泉県知事と成ル、夫与引渡ス、
明治三午年より当埼玉県令始而野村盛秀殿管轄ニ相成ル、当家
ハ往古ヨリ数代相伝ハリ居リ候処、寛永年間ニ至リ渡リ川小礪
梶之助与分地之由也、後チ徳川ヨリ御縄請承応三午年四拾九軒
之内、縄請小礪権左衛門也（以下略）」

この『小礪家文書』を所有する小礪家は、当該文書によると、
「往古から続く家で、数代を経た寛永年間(1624-45)に渡り川の
地に小礪梶之助家を分家に出すとともに、承応3年(1654)には
御縄受（おなわうけ）となっている家柄である」とある。

ここにいう御縄請とは、地域の開発者として領主から検知を
受けた家柄という意味で、一般的には検地帳を持っている家の
ことである。この文書を記した小礪権左衛門は、縄請であることと

もに、明治初期には須影村の村方三役（名主・組頭・百姓代）の内の名主の補佐役である組頭に就任している。

2 須影村に浄慶寺があった

『小磯家文書』に「当領須影村菩提寺之義ハ足利天下之頃ハ上藤井村源長寺旦那与申伝ヘアリ」とあり、須影村は室町時代には、上藤井村の源長寺の檀家であったことがわかる。

慶長6年(1601)に羽生藩から次のような文書が出されている。

桑原・佐伯・天野連判状

須影会下山之内ニ号浄慶寺与古来源長寺之末寺ニ候近年中絶之旨此度自源長寺再興候 於彼寺不可横合者也 伋如件

丑五月十七日

桑原九兵衛（花押）

佐伯図書助（花押）

天野与大夫（印）

羽生城主木戸忠朝の家臣であった鷺坂軍蔵は、羽生城が没落した後、浪人となり、出家して不徳道可と称していたが、天正18年(1590)に徳川家康の家臣の大久保忠隣が羽生城主となった折、請われて城代家老となった。不得道可は、木戸忠朝の菩提寺であった上藤井村の源長寺が荒廃しているのを憂い、大久保家に再興を願い出て許可されている。『桑原・佐伯・天野連判状』は、その折、羽生城の奉行である桑原九兵衛ら3名の連署で出された文書で、須影郷会下山に古来より源長寺の末寺となっている

浄慶寺があり、近年、中絶の状況となっている。源長寺から再興したいとの申し出があるが、それについては横合をいれることはまかりならないとある。

『騎西町史』にこの文書の解説として、「須影郷（現羽生市須影）会下山の浄慶寺については、源長寺から再興したいとあるが、他から横合を入れてはならないとの証状である。浄慶寺は現存しないが、かつて同所の会下山に存在していたことが知れる。」とある。

羽生市須影地内に愛宕神社がある。

今は、開発の波により現存していないが、この愛宕神社周辺には、かつては広大な砂丘が連なっていた。旧利根川の流れが、今の手子堀用水路筋を流れていた折に形成された河畔砂丘である。

明治14年(1881)の『耕宅地其他一筆限帳』の地目「林」と記されている地番を地籍図に落してみると、その広大な全容がわかる。

古老の話によると、現在愛宕神社があった地は砂山から続く須影砂丘が連なっており、この愛宕神社のあった砂丘を「会下山（えげやま）」と呼んでいたという。

前出の『騎西町史』によると、「会下とは禅宗において法会の下に連なる僧を意味しており、源長寺の門下である浄慶寺をさしたものである。」とある。会下とは、会座（えざ）に集まる門下の意で、禅宗・浄土宗などで、師の僧のもとで修業するところという。源長寺の檀家地である須影の地に、会座の寺としての浄慶寺があったが、江戸時代初期に羽生藩より、廃寺とされたものと思える。

3 多門寺もあった

この『小磯家文書』に「又当村ニ而、多門寺与申寺有之正能村
竜花院末寺与伝へアリ」とあり、須影村には正能村龍花院末寺の
多門寺という寺院があったと伝えられているとある。

この存在を裏付けるように、平井辰雄氏の『近世羽生郷土史』
に、慶長 17 年(1612)8 月 6 日に書かれた『関東八州真言宗連判
留書』にも須影村の多門寺が記されているとある。

羽生領内に多門寺村(加須市多門寺)がある。

多門寺があったことから地名が付けられたといわれているが、
安土桃山時代の天正年間(1573-92)に利根川の洪水により流出
し、その後は再興されることなく現在に至っている。

前出の『関東八州真言宗連判留書』には、羽生村の正覚院、堤
村の延命寺、正能村の龍花院、南篠崎村の普門寺等とともに須影
村の多門寺は記載されているが、多門寺村の多門寺は記載され
ていないことから、慶長 17 年(1612)には、多門寺村の多門寺は
存在していない。

これらから、須影村には、『関東八州真言宗連判留書』に掲載
されるほどの寺院(多門寺)があったことがわかる。

多門寺の本寺である龍花院の本尊は不動明王で運慶作と言わ
れている。

蓮華寺の檀家寺であった東曜寺観音堂の本尊となっている千
手観音立像も運慶作と伝えられている。

多門寺の創立年代は定かではないが、龍花院、多門寺、蓮華寺、
東曜寺と継承された千手観音像と思われる。

第5章 神仏混交による須影八幡宮の発展

1 須影八幡宮の別当寺として蓮華寺が建立される

(1) 荒廃寺であった須影多門寺の再興建立か

寛永14年(1637)、島原の乱後、キリシタン禁制を目的として定められた「宗門改め」により、国民全員がいずれかの寺に属さなければならなくなった。しかしながら、各集落とも、神社は勧請していたものの、寺院の無い村が多かったことから、急遽、荒廃していた寺を再興させたり、神社に付随して別当寺を新設したりして対応することとなった。

蓮華寺については、『新編武蔵風土記稿』に「別當 蓮華寺開山長義寛永七年九月廿一日示寂」とあり、また、前出の『小磯家文書』には「寛永ニ至リ蓮花寺ヲ建立、本山ハ高野山竜光院ト申伝フ」と記されている。

蓮華寺は、高野山真言宗別格本山龍光院（和歌山県高野町）の末寺として、寛永時代(1624-44)に建立されたとある。

また、『新編武蔵風土記稿』及び須影八幡宮に残る『蓮華寺一代過去帳』に、蓮華寺開山の長義は寛永7年(1630)に没したとあるところから、蓮華寺の建立は寛永元年(1624)から寛永7年(1630)の間となる。宗門改めに先立つ建立であった。

『新編武蔵風土記稿』に、須影多門寺の本山である正能村龍花院について、「此寺賓も烏有（うゆう）となりしと、住僧のことには大同二年の開闢（かいびやく）と云もの疑ふべし、大同は弘法大師の時代なれば、かかる遠境へ小寺を開くべき理なし、其後鎌倉時代に至り、僧日鑊（にちばん）開復せり、此僧頼朝の甥に

て、當代まで七世に及ぶといへど、年暦も齟齬（そご）すれば覺束なし、（中略）本尊不動、運慶の作、長三尺」とある。

蓮華寺の檀家寺である東曜寺観音堂の本尊となっている千手観音立像は鎌倉時代の名工である運慶の作と伝えられている。

多門寺の創立年代は不明であるが、本山の龍花院は鎌倉時代からの歴史を持つ古寺で運慶作の不動明王像を本尊としている。

多門寺を通じ、龍花院と蓮華寺は通じているのではと思われる。蓮華寺は、『新編武蔵風土記稿』に「別当寺連華寺」と記載されていることから、須影八幡宮の別当寺として、古寺である多門寺を母体に、建立されたものと思える。

以後、須影八幡宮は、神仏混交の中、蓮華寺とともに歩むこととなった。

（２）蓮華寺の開基は誰か。

開基として、まず考えられるのが、名主の小磯家であるが、小磯文書にそれなりの記載がないところをみると、その可能性は薄いと思われる。

次に考えられるのが、建立当時、この地域の支配者（羽生領代官）であった大河内金兵衛久綱である。

蓮華寺が建立されたのが寛永元年(1624)から寛永 7 年(1630)の間となり、その同じ頃、羽生領代官であるとともに忍城番であった金兵衛久綱により下新郷の大光院が建立されている。

それも新井家（漆原家の先祖）が、かつて建立した新郷寺を再建開基したのであった。その荒廃した姿を憂いたものと思える。

この須影の地は、慶長 19 年(1614)から寛永 15 年(1638)まで

間は、羽生領代官である大河内金兵衛久綱の支配下であった。その上、久綱が正保 3 年(1646)に死去した折、その位牌が、何故か、開基となっている大光院ではなく、蓮華寺に安置されていることから考えるに、蓮華寺は久綱にとって深く関係のある寺であったように思える。

この須影村の多門寺も下新郷村の新郷寺と同様、荒廃の状況にあったことから、蓮華寺として再興されたのではないか。

大光院と蓮華寺、どちらが先に開基されたか分からないが。

2 蓮華寺門徒寺として東曜寺を建立

『新編武蔵風土記稿』の「東曜寺」の項に「蓮華寺門徒なり、恵日山と号す、地蔵を本尊とせり、開山は本寺三世の僧淳恵にて、承応の頃創立せり。」記されている。

また、同誌「観音堂」の項にも「千手観音にて立像一尺、運慶の作なり、蓮華寺三世の僧淳恵萬治元年九月起立すと云、東曜寺持」と記されている。そして「鐘楼」の項にも「宝永三年正月鑄造の鐘なり」と記されている。

いわゆる蓮華寺第 3 世淳恵の代の承応年間(1652-54)に蓮華寺の門徒寺として、恵日山東曜寺(本尊：地蔵菩薩)を建立し、淳恵は、その開山となるとともに、万治元年(1658)9 月には、その東曜寺持ちとして観音堂(本尊：千手観音像・伝運慶作)を建立している。

3 須影八幡宮・蓮華寺、御朱印地を賜わる

『新編武蔵風土記稿』に「村の鎮守なり、慶安二年八月二十四

日、社領十九石五斗餘を賜ふ」とある。

かつては、神社に所属してその経済を支えた民を「神戸（かんべ）」といい、その神社に祖・庸・調を納めることにより、神社の経済が運営されていた。

中世後期、特に戦国時代となるとその社領も次第に浸食され、ついには太閤検地により没収され、代わりいくばくかの社領が与えられることとなった。あとを受けた江戸幕府は、それを追認しつつ、新しく配分するという形で将軍の名において「寺社領安堵の証明書」、いわゆる朱印状を交付した。

須影八幡宮（蓮華寺）も、慶安2年(1649)8月24日に、将軍徳川家光から19石5斗余の朱印地を賜っている。

その後、朱印状は、綱吉、吉宗、家重、家治、家斉、家慶、家定、家茂と歴代将軍が変わるごとに再発行された。

『羽生ふるさと探訪』に、足利藩領における寺社への御朱印状の交付状況が掲載されていた。その概要は次のようであった。

足利藩江戸屋敷は預かった領内の朱印状を家臣11名でもって、中山道、館林道を通り、新郷関所を経て、足利陣屋に届けた。受け取った足利陣屋は、天保11年(1840)9月21日、足利藩奉行の名のもと、該当の寺院等に10月初旬に朱印状（12代将軍家慶）が交付される旨を通知、その後の11月7日に、12日に交付するので足利陣屋に集まるようにとの命を出した。

11月12日正午、足利学校、鑊阿寺、法玄寺、鶏足寺、円通寺、長林寺、満福寺、最勝寺、長善寺、不動院、五大尊の順に広間に並べ、順に朱印状を交付した。この内の長善寺（発戸）、不動院（名村）は現羽生市内の寺院である。

受領者は、正面に座っている家老から朱印状を受取り、一礼して元の場所に戻る。全員受領後、朱印状を箱に入れ、玄関先で帳簿に捺印して陣屋を出て、終了となる。

なお、最勝寺では、家老に秩父絹裏地 1 反、2 人の奉行に大風呂敷を各 1 枚、代官 5 人に足袋を各 1 足を贈っている。

4 蓮華寺門徒寺として善生院を建立

『新編武蔵風土記稿』に「善生院 是も蓮華寺の門徒にて、本尊薬師を置り」とあり、『蓮華寺一代過去帳』に「四世秀等 寺建立之僧」とある。また秀等の墓碑に寛文 9 年(1669)5 月 21 日亡とある。3 世淳恵に引き続き、4 世秀等も檀家寺として善生院(本尊：薬師如来像)を建立したと思える。

5 蓮華寺、真言宗智山派智積院の末寺となる

『蓮華寺一代過去帳』に「第 5 世了恵 京都智積院末寺成山号院号此時定」とあり、蓮華寺 5 世了恵の代に、蓮華寺は、高野山竜光院を離れ、京都の智積院の末寺となり、真言宗智山派となるとともに、山号院号も「月光山清浄院蓮華寺」となった。

日本での真言宗は、入唐して恵果に学んだ弘法大師空海が弘仁 7 年(816)に高野山に金剛峯寺を開創したのに始まる。

12 世紀前半、興教大師覚鑿(1095-1143)は、金剛峯寺の座主となったが、旧勢力からの反発が強く、ついに保延 6 年(1140)に 700 人の僧とともに高野山を放れ、根来山に根来教学を独立させた。この教学を旧来の「古義」に対し「新義真言宗」と呼んだ。この根来山も天正 13 年(1585)には、豊臣秀吉の焼打ちに会い、

宗徒は離散してしまった。

その中の専誉(1530-1604)は、後に豊臣秀長に招かれて奈良の長谷寺に教学（豊山派）を開き、玄宥(1529-1605)もまた徳川家康の庇護を受けて京都の智積院に教学（智山派）を開いた。

蓮華寺は、当初は古義真言宗であったが、18世紀当初の5世了恵の代に新義真言宗智山派に変更となった。

6 八幡宮社殿を再建、併せて阿弥陀堂を建立

『蓮華寺一代過去帳』に「第8世宥尊 鎮守八幡再建元禄十四年并本地佛本地堂殿堂法器宝永六年三月」とあり、須影八幡宮に残る棟札にも「古拝殿 元禄十四年再建」とある。

それらからみると、蓮華寺第8世の宥尊の代の元禄14年(1701)に八幡宮が再建されていることがわかる。

そして、併せて宝永6年(1709)3月に八幡宮の祭神である八幡大菩薩の本地佛である阿弥陀如来を祀る阿弥陀堂を設けたとある。また、宝永3年(1706)に鐘楼の鐘を鑄造している。

7 社殿が再び再建される（安政5年）

（1）拝殿の再建と幣殿・向拝の新造

須影八幡宮は、江戸時代の末期の安政5年(1858)にも改修されている。その折に作成された棟札によると、拝殿を再建するとともに、幣殿と向拝を新造していることがわかる。

八幡宮の棟札によると、拝殿は、蓮華寺18世再住20世潮元の大願主のもと、須影の大工棟梁清水仙松尚通、本川俣の棟司三村若狭正利・棟司三村吉左衛門正弘の建築で、上州花輪（みどり

市)の彫物工石原恒蔵主利及び下岩瀬の彫物工入江文治郎茂弘が彫刻したとある。

また、拝殿正面の龍神の彫り物の裏側にも棟札と同じ「上州三輪村石原恒蔵主利」の文字が記されている。

【須影八幡宮棟司 三村若狭正利】

三村家は、菅原道真を祖とする五条為経の子で、継承争いに敗れ、京から母とともに下野国都賀郡柳原新田(栃木市)で宮大工を営む三崎氏(医師の中村氏宅に住む)を頼り下向した五条経治・千吉(仙斎)の兄弟に始まるという。

兄の経治は宮大工の三崎氏の、弟の千吉は三崎氏の大家である医師の中村氏の、それぞれの弟子となり、修行後、本川俣村に落ち着き、苗字も、「五条」の名を捨て、三崎氏の「三」と、中村氏の「村」をとって「三村」となり、本川俣村に居したという。

それが宮大工三村家で、三村若狭正利は初代三村経治から数えて7代目にあたる。

三村家には、初代三村経治から代々の事績を記した『菅原氏支裔三村家系図』があり、その7代正利の項に「上野国邑楽郡板倉雷電神社 下野国田沼郡荷神社社殿拝殿 武蔵国不動岡不動堂 下総国葛飾郡野田町愛宕神社及び武蔵上野下野下総諸州社寺院の建造物を正利翁同母弟なる林紋左衛門昌道其門弟子の規矩準繩計画に拘はらざる多し」とあり、他に、須影八幡宮を始めとして、加須龍藏寺本堂等、多くの寺社を建立している。

なお、正利は、文化元年(1804)11月14日に生まれ、明治25年(1892)12月29日に没している。享年89歳であった。

(2) 壁面彫刻

社殿の各所に刻まれた彫刻は見事なものである。

特に本殿の壁面にはめ込まれている 6 枚の羽目板の彫刻は素晴らしいものであり、昭和 44 年(1969)3 月 20 日に羽生市文化財(彫刻)に指定されている。それらは、本殿の東・北・西の壁面にそれぞれ 2 枚づつはめ込まれており、すべて八幡宮にちなむ彫刻が描かれている。

まず、東壁面の南側面の羽目板には八幡宮再建時における「地形(じがた)つき」が、東壁面の北側面には国土平定の礎となった須佐之男命の「八岐大蛇退治」が、南壁面の 2 枚の羽目板には八幡大神の祖である誉田別命の母の神功皇后の「三韓征伐」が、そして西壁面の 2 枚の羽目板には、五穀豊穡を願い「八人の福神」と、すべて「八」に関わる縁起が描かれている。

「八」は八幡宮の「八」であり、末広がりの「八」である。

【壁画の修復】

平成 23 年(2011)3 月 11 日、日本周辺における観測史上最大といわれているマグニチュード 9.0 の東北地方太平洋沖地震が発生した。その折、東側壁面彫刻の 1 枚(須佐之男命大蛇退治壁



画)が落下し、一部損傷、同年 12 月 14 日に修復された。

落下し修復された東面壁画

修復までの経過は、次の通りであった。

(1) 事実が生じた日 平成 23 年(2011)3 月 11 日

(2) 事実を知った日 同年 3 月 23 日

(3) その後に取った措置

風雨を避けるため落下地点より社殿裏側に移動、
破損箇所の部品は紙封筒にひとまとめにして保管。
林宏一氏に修理方法等について教示を受けた。

(4) 「棄損届」を教育委員会に提出 同年 5 月 6 日

(5) 「修理届」を教育委員会に提出 同年 11 月 22 日

須影八幡社氏子代表名で、市教育委員会あてに、
「羽生市指定第 26 号 昭和 44 年 3 月 20 日指定」
についての「棄損届」及び「修理届」を提出

(6) 修理施工者

- ・彫刻破損部の接合 (有)古文化在保存修復研究所
- ・壁面への取付 吉田茂建設(有)

(7) 修理方法

破損した箇所を清掃後、破損部について麦漆を用
いで接合し、矧ぎ線については錆漆を用いて補修
した。欠失部・補修部については最低限の補彩後、
ネジ頭を色合わせされたステンレス木工ネジで
元の壁面に取り付けるとともに、追加補強として、
落下しなかった他の 5 か所についても同様のス
テンレス木工ネジで壁面に止めなおした。

(8) 修理終了日 平成 23 年 12 月 14 日

「修理終了報告書」を教育委員会に提出

【八幡宮地形搗き】

本殿東側面南側羽目板に描かれているのは、八幡宮再建時ににおける地形搗きの様子を描いた彫刻である。地形搗きとは地固めのことで、家などを新築するときに、基礎の地ならしをして固めるもの



「地形搗き」の彫刻

で、今も昔も必要な作業である。

石丸太の一端に数本の縄をつけ、縄には棒を束ねた部分を通して各自が手に持つ、縄を引くと丸太が持ち上がり、縄を同時に放すと丸太が落ちて地面を突き固める。これを繰り返して行う。この作業には数人の呼吸を一致させるのが肝要で、そのために地つき唄を歌って互いに呼吸を合わせていた。

この壁画には、左端に八幡宮の象徴である「旗掛けの松」を描き、その横で八幡宮の再建を喜び、唄いながら作業に励む姿が生き生きと描かれている。

【須佐之男命の八岐大蛇退治縁起】

本殿東側面の北側羽目板には、天上の高天原（たかまがはら）から地上の葦原中国（あしはらなかつくに）に降り、地上（国土）を平定したといわれている須佐之男命（すさのおのみこと）の「八岐大蛇（やまたのおろち）退治縁起」が描かれている。

高天原を追放された須佐之男命が、櫛名田比売（くしなだひめ）を救うために、八つの頭と八本の尾を持った八岐大蛇を退治した話で、この時、尾の中から出てきた太刀が三種の神器の一つである「天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）」である。

三種の神器とは、八咫鏡（やたのかがみ）、八尺瓊勾玉（やさかのまがたま）と天叢雲剣のことで、歴代の天皇が代々継承していく神器である。八咫鏡と八尺瓊勾玉は、天照大神（あまてらすおおみかみ）が天石屋戸に隠れ、世の中が真っ暗になった時に、これを解決した時に使用されたといわれている神器である。天叢雲剣は、日本武尊（やまとたけるのみこと）が使用したことから草薙剣（くさなぎのつるぎ）ともいわれている。

景行天皇の御代、伊勢神宮の倭姫命（やまとひめのみこと）は東征に向かう日本武尊に神剣を託した。尊の死後、剣は伊勢神宮に戻ることなく、尊の妻の実家である尾張氏が祀り続けた。熱田神宮である。



「須佐之男命大蛇退治」の彫刻

恐ろしい顔をした大蛇に立ち向かう勇ましい須佐之男命の姿とともに、その横に優しい顔をした櫛名田比売が描かれている。

八岐大蛇は川を表し、櫛名田比売は田を表すと言われ、須佐之男命は荒れ狂う大地を治め、田畑を守った治水の神であるとも言われている。

【八幡大神誉田別命の母である神功皇后の三韓征伐縁起】

本殿北側面の羽目板には、「神功皇后の三韓征伐縁起」が二面に渡って描かれている。

仲哀天皇 8 年、気長足姫（神功皇后）は筑紫の檀田宮で神託を行ったところ「海を渡り、金銀財宝のある新羅を攻めるべし」という託宣を受けた。神功皇后は軍を率いて海を渡り、古代の朝鮮半島にあった百済・新羅・高句麗の三国（三韓）を平定した。

須影八幡宮の壁画は、その時の、いわゆる三韓征伐の様子を描いたもので、甲冑をまとい、薙刀を持つ神功皇后の凛々しい姿が描かれている。

神功皇后は、三韓征伐の後、九州で誉田別命を出産し、都に戻り、誉田別命が応神天皇となるまでの間、摂政として補佐し、統治したという。筑紫をはじめとする北九州の多くの地域では、三韓征伐を行った神功皇后とその子の筑紫で生まれた誉田別命を崇拝しており、八幡宮の発祥神社である大分県の宇佐神宮は、誉田別命が垂迹した「八幡大菩薩」を祭神としている。

なお、『日本書紀』によると、応神天皇は 3 歳で皇太子となり、



「神功皇后の三韓征伐」の彫刻

71 歳で即位したとあり、仲哀天皇が崩御した 367 年から、応神天皇が即位した 437 年までの間は、神功皇后が事実上統治していた。いわゆる天皇不在の期間であった。

【八人の福神】

『羽生市の文化財』の「須影八幡社彫刻（彫刻）」の項の説明文に「本殿の西側には七福神、北側には神功皇后縁起、東側には大蛇退治、地形搗きの様子がいきいきと彫られており、まことに見事である。」と記されている。

八幡宮の壁画をよく見ると、西側の壁画には 8 人の福寿神が神社の再建を祝い、宴をしている姿が描かれているのがわかる。

いわゆる「七福神」ではなく、「八福神」が描かれている。

「七難即滅、七福即生」、七福神を参拝すると、七つの災難が除かれ、七つの幸福が授かると言われている。

ここの彫刻には、福祿寿、寿老人、布袋尊、恵比寿、大黒天、毘沙門天、弁財天の七福神に加え、一神を加えた八人の福神が描かれている。八は、末広がり、七転び八起き等縁起の良い数であり、八幡宮の八でもある。また、中国には、八福神があり、宝船に八人が乗っている姿が描かれているという。

大黒天、弁財天、毘沙門天、吉祥天がインドの神で、福祿寿、布袋尊、寿老人は中国の神で、恵比寿のみが日本の神様である。

財宝と食物の守護神とされる大黒天、インドのシバ神の化身とされ、後に日本の大国主神と同一視されている。

インドでは水神であった弁財天が、日本に入り音楽・芸能の神となった。

北方世界を守る守護神として財宝を守る毘沙門天は、仏法を護る守護神として、福德増進の神として上杉謙信らに愛された。

ユーモラスな風貌の布袋尊、十世紀初頭の中国の禅僧である契此がモデルと言われている。福・富をもたらすという。

福祿寿と寿老人は、ともに、人の寿命を司る南極星が神格化された南極老人がモデルとされている。

恵比寿は、元は西宮神社の祭神である水蛭子神（ひるこのかみ）で、開運守護・商売繁盛・五穀豊穡の神として親しまれた。

では、八番目の福神は誰か。

中野区の歴史民俗資料館で、「七人の福神たち」の企画展が開催され、そこでは八福神についても展示されており、八神目は「福助」や「お多福」が祀られている例があるとしている。

お多福の起源は、鎌倉時代初期の大工の高次の妻の阿亀（おかめ）に女性を表す舞の面（お多福）や天之宇受売命（あめのうずめのみこと）が習合した神であるという。

横浜市瀬谷区の「瀬谷八福神」及び豊橋市の「吉田八福神」は「達磨大師」を加えて八福神としている。

達磨大師とは、5世紀頃のインドの王子と言われ、中国の宋に渡り、禅宗の開祖となった高僧で、座禅9年により、手足が腐り落ちたといわれている。

千葉県八千代市の「八千代八福神」及び久喜市の「栗橋八福神」では「吉祥天」を加えて八福神としている。

吉祥天とは、インドのヒンズー教の女神であるラクシュミーが仏教に取り入れられ、吉祥の意から、繁栄・幸運もたらす神となったといわれ、菅原道真の幼名が吉祥丸であったことから、天

神信仰とともに親しまれてきた。

須影八幡宮の壁画を描いた上野国花輪村の彫刻師石原恒蔵主利は、父の石原常八主信とともに、妻沼歓喜院の壁画も描いている。その豪壮な彫り物は見事である。

その中に、七福神が描かれており、寿老人、布袋尊、恵比寿、大黒天、毘沙門天、弁財天、吉祥天の7神で、福祿寿の代わりに吉祥天が描かれている。

須影八幡宮の8人目の神は、吉祥天か。



「八人の福神」の彫刻

（3）拝殿天井図「花鳥図」

拝殿の格天井には、文久2年(1862)に熊谷の岩田霞岳により書かれた「花鳥図」が描かれている。

霞岳は、本名を国太郎といい、文政11年(1828)に熊谷宿で生まれた画家で、武田実庵に師事し漢学を学んだ後、16歳の時、江戸に出て、絵を学んだ。晩年は熊谷に戻り、門弟の指導に当たっていたが。明治22年(1889)6月19日、62歳で没している。

行田琴平神社に明治6年に奉納された久下河岸を描いた絵馬「新川船」など多くの作品を残している。

8 蓮華寺の廃寺と八幡宮の独立

(1) 蓮華寺廃寺となる

慶應4年(1868)に出された神仏分離令に伴う廃物毀釈により、明治5年(1872)、率先して明治政府に恭順した陸奥泉藩主本多越中守により、その所領内にあった小松寺(小松村)、全福寺(桑崎村)、寶光院(加羽ヶ崎村)、長泉寺(秀安村)、長光院(常木村)とともに、須影村内の蓮華寺、東曜寺、善生院の寺院が廃寺になってしまった。

これにより、蓮華寺は、傘下にあった八幡宮を除いて、全て破却されるとともに、土地においても、廃寺後、必要最低限の八幡宮用地と墓地を除いて、処分された。

こんな話が伝えられている。

寛政2年(1790)、陸奥泉藩(いわき市)藩主の本多弾正大弼忠籌は、飢饉の折、間引きを禁じて小児養育料を支給するなど、民生に力を注いだことから、松平定信の目にとまり、若年寄に抜擢された。その後、側用人、老中格と進み、寛政改革を実施、その功により、武蔵・上野の内5千石を加増された。その時、泉藩の領地となったのが、桑崎村・小松村・加羽ヶ崎村・秀安村・須影村の地であった。その後、本多家は、忠誠、忠知、忠徳、忠紀と続き、次の忠伸の時に廃藩置県を迎えている。

その内の誰だかわからないが、ある時、寶光院の住職と碁をうっていた折、僧に一本とられ、「待った」と言ったところ、僧が「待てぬ」と言ったため、立腹した本多某は碁盤をひっくり返し、「よし、今に見ておれ」と、その僧に関わる寺をことごとく廃寺にしてしまったという。(『さいたまの神社』)

（２）蓮華寺・八幡宮の境内地等処分状況

桑崎の小沢丘家所蔵の、明治５年６月に埼玉県に提出した八幡社・白山社・蓮華寺・東曜寺・善生院の２社３寺における跡地処分の文書『乍恐以書付奉申上候』によると、次の通り処分されている。

○墓所

旧蓮華寺境内屋敷 2 反 3 畝

○村共有地

旧白山社改地 1 反 3 畝 10 歩（畑）

○百姓持分

旧八幡宮御朱印地 9 反 6 畝 10 歩（田畑）

○旧泉県士族屋代義雄

旧八幡社御朱印地 1 反 4 畝 12 歩（畑）

旧東曜寺除地 1 反 4 畝 9 歩（田畑）

旧蓮華寺持地蔵領 4 反（畑）

○八幡宮仮祠掌飯野波江

旧八幡社御朱印地 5 反 7 畝 28 歩（田畑）

○上地

旧八幡社御朱印地 4 反 8 畝 26 歩（畑）

旧蓮華寺境内屋敷 4 反 1 畝 15 歩

東曜寺・善生院廃寺跡 1 反 1 畝 23 歩

見出し地 1 町 1 畝 9 歩（下々畑）

見出し地（小松村） 2 町 1 反 23 歩

【旧泉県士族屋代義雄】

屋代義雄は、明治4年(1871)4月に陸奥泉藩からの藩命により、種痘実施のため須影村に派遣された藩医で、泉県(明治4年7月に泉藩から泉県となる)が廃止されると、須影村に土着した。

建福寺の墓所に立つ『屋代義雄君墓誌銘』に、明治6年10月に羽生学校長になるため羽生町に住み、その後、明治9年9月に羽生町に公立明治病院が発足した折、招聘されて院長になったとある。そして、明治病院廃院後は、今の中央5丁目に私立羽生病院を設立している。

明治26年2月5日、46歳の若さでこの世を去っている。

なお、羽生病院は屋代の死去とともに閉院となっている。

(3) 蓮華寺廃寺後の本尊等の行方

蓮華寺の廃寺の際、寺にあった仏像・仏具等はどうなったのか、その行方を追ってみた。

① 東曜寺本尊地藏菩薩像

蓮華寺20世潮元の実家にあたる大貫家に隣接した地に、地藏立像を安置した小さな御堂がある。

御堂(地藏堂)の中に厨子があり、その中に一際美しく煌びやかな地藏菩薩立像が鎮座している。

手にはあらゆる願いを叶え、病気を治すという宝珠を持ち、頭上に3つの宝珠をあしらった輪光(円の輪郭状の光背)を掲げている。全身金箔で覆われ、その体には真っ赤な布がタスキのように掛けられている。台座も蓮の花をかたどった蓮華座で上から金、緑、青と、その下にある六重の台座も黄、赤、紫などとそれ

ぞれ彩色されている。

この色彩の豊かさは目を見張るものであり、その神々しい姿は見ていだけで、心が洗われ、思わず触れたいくなるほどの素晴らしいものである。

路傍にある地藏尊とは一味違う、寺院の本尊仏と言われてもおかしくない十分品格のある地藏尊である。

また、地藏尊を包む厨子も外側は黒色であるが、内面は仏像と同様の金色に彩られている。

蓮華寺の門徒寺として、承応年間に蓮華寺3世の淳恵により、蓮華寺領内に建立された東曜寺の本尊が地藏菩薩像であった。

その地藏菩薩像と思われる。

この地藏尊もかつては羽生騎西道（国道122号の旧道）沿いに鎮座していたものが現在地に移されたとある。

東曜寺も明治5年に蓮華寺とともに廃寺となり、その寺領地は屋代義雄氏に払い下げられていることから、屋代氏により、その所有地内に、地藏堂が建立され祀られていたものが、現在の地に移設されたのではと思われる。



地藏尊

② 善生院本尊薬師如来像

小儀家の敷地内の公道に面したところに小さな薬師堂であり、そこにはきらびやかな薬師如来立像が祀られている。蓮華寺とともに廃寺となった蓮華寺の檀家寺である善生院の本尊として

祀られていた薬師如来立像である。

薬師如来像を受け継いだ小磯家も、地藏尊を受け継いだ屋代家同様、当初は居宅内に安置していたが、「村人を見守るのが薬師様の心」と感じ、敷地内、それもいつでも誰もが拝めるようにと、公道に正面を向けた御堂（薬師堂）を設け、そこに鎮座させた。小磯家の暖かい心が偲ばれる行為である。

肘を曲げた右手は、手のひらを前に向け施与する形をとり、左手には薬師如来特有の人々を助けるための薬壺を持ち、金色の光輝く光背とともに全身金色に輝く神々しい立姿をし、かすかに笑みを浮かべた優しい顔と、これも見るだけで心が洗われる仏様である。



薬師如来立像

③ 東曜寺観音堂本尊千手観音像（伝運慶作）

『新編武蔵風土記稿』に「観音堂 千手観音にて立像一尺、運慶の作なり、蓮華寺三世の僧淳恵萬治元年九月起立すと云、東曜寺持」と記されている。いわゆる、東曜寺観音堂に運慶作と言われている立像 1 尺の千手観音を万治元年(1658)9 月に安置したとある。廃寺の折、村の有力者であった須影の某家において、大切に守られてきた。

作者と伝わる運慶は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活躍した仏師で、貞応 2 年(1223)に没している。運慶の東国

での活躍は文治 2 年(1186)に北条時政に呼ばれ伊豆で仕事をしたのが最初で、足利市の樺崎寺(廃寺)にも運慶作と伝わる大日如来像があるなど、関東においてもいくつかの事績を残している。この千手観音像も、その頃の作品の一つなのかもしれない。

かつて存在していたという浄慶寺または多門寺から蓮華寺を経て、東曜寺観音堂に安置されたのかもしれない。

④ 蓮華寺本尊等

『新編武蔵風土記稿』によると、蓮華寺本堂の本尊は不動明王像、及び阿弥陀堂の本尊は阿弥陀如来像と記されているが、それらについての所在は定かではない。廃寺の折、地元の篤志家のもとで、大切に保存されていると思われる。

⑤ 大河内金兵衛久綱の位牌

大河内金兵衛久綱の位牌「木光院殿法林崇無居士覺靈」は、蓮華寺に安置されていたが、廃寺後、移され、現在、加須市志多見の長昌院に安置されている。

昭和 31 年(1956)4 月 16 日、「大河内金兵衛の位牌」は、長昌院に安置されている「松平伊豆守信綱の位牌」とともに、加須市有形文化財(歴史資料)に指定されている。

【大河内金兵衛久綱】

大河内金兵衛久綱は、元亀元年(1570)、三河国大河内村(岡崎市)において徳川家家臣である大河内秀綱の子として生まれ、慶長 15 年(1610)に徳川家康の旗本となった。

慶長 19 年、大久保忠隣の改易により羽生藩が消滅、その所領が直轄地となるにおよび、それを管轄する羽生領代官として派遣されたのが大河内金兵衛久綱で、お役御免を申し出る寛永 15 年(1638)12 月まで続いた。

久綱は、羽生領代官として、北方用水路及び南方用水路の開削、喜右衛門新田・町屋新田・与平衛新田・寺ヶ谷戸新田等の新田開拓、及び下川崎の志多見溜井を造成したほか、忍城番代として、日光脇往還の松並木、いわゆる勘兵衛松の植栽を命じるとともに、下新郷の大光院を再興している。

正保 3 年(1646)4 月 3 日死去、その位牌は蓮華寺に安置されたが、廃寺後は長昌院に移設されている。

(4) 蓮華寺歴代住職とその事績

① 歴代住職

開山	長義		寛永 7 年(1630)9 月 21 日亡
2 世	円海		
3 世	淳恵		
4 世	秀等	法印権大僧都	寛文 9 年(1669)5 月 12 日亡
5 世	了恵	法印	
6 世	秀慶	法印権大僧都	享保 3 年(1718)9 月 14 日亡
7 世	性遍		
8 世	宥尊	法印権大僧都	宝永 6 年(1709)5 月 29 日亡
9 世	宥壽	法印権大僧都	延享元年(1744)2 月 3 日亡
10 世	眞恵		
11 世	亢戒	法印権大僧都	寛延 3 年(1750)6 月 28 日亡

12 世 戒慈 法印権大僧都 宝暦 7 年(1757)4 月 16 日亡
 13 世 戒範 法印権大僧都 安永 7 年(1778)6 月 25 日亡
 14 世 慧範 法印 寛政 11 年(1799)8 月 11 日亡

(墓碑銘：恵範)

15 世 宥範 法印権大僧都 寛政 2 年(1790)10 月 19 日亡
 16 世 祐情 法印 天保 13 年(1842)2 月 6 日亡

(墓碑銘：宥精)

17 世 潮音 法印 天保 5 年(1834)7 月 28 日亡

18 世 潮元 (20 世再住)

19 世 心順 文久 2 年(1862)9 月 19 日亡

20 世 潮元 法印権大僧都 明治 4 年(1871)9 月 20 日亡

21 世 守心 法印 文久 2 年(1862)4 月 18 日亡

22 世 心英 (下須戸村医王寺住職となる)

③ 歴代住職の事績

『一代過去帳』及び『新編武蔵風土記稿』から、歴代住職の事績をたどると次のようになる。

- ・ 高野山真言宗別格本山龍光院(和歌山県高野町)の末寺として、寛永元年(1624)2 月から 7 年 9 月の間に蓮華寺が建立する。
- ・ 3 世淳恵、慶安 2 年(1649)8 月 24 日に、徳川三代将軍家光から八幡社に対し、御朱印地 19 石 5 斗余を賜っている。
- ・ 3 世淳恵、承応年間(1652-54)に蓮華寺の門徒寺として、恵日山東曜寺(本尊：地蔵菩薩)及び鐘楼を建立し、その開山となるとともに、万治元年(1658)9 月には、その東曜寺持ちとし

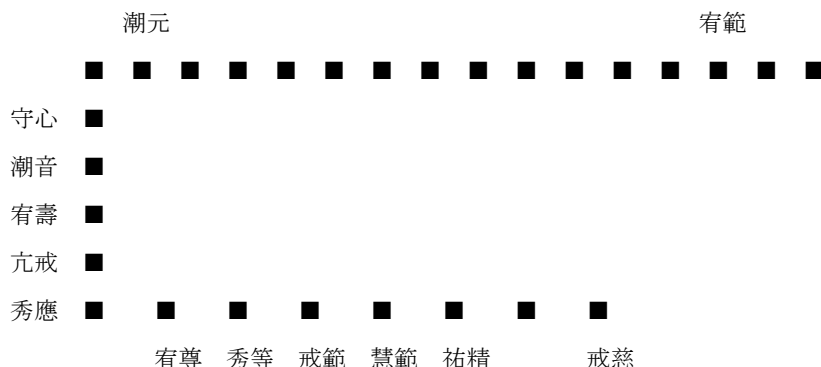
て観音堂（本尊：千手観音像・伝運慶作）を建立している。

- ・ 4世秀等については、過去帳に「寺建立之僧」と記されている。檀家寺の善性院と思われる。

万治元年(1658)から寛文9年(1669)の間に、善性院が建立されたのだろうか。本尊は薬師如来像とある。

- ・ 5世了恵の代、龍光院の末寺から京都智積院の末寺となり宗派も真言宗智山派となった。その折、山号院号を賜わり、月光山清浄院蓮華寺となった。
- ・ 8世宥尊、元禄14年(1701)に八幡宮を再建するとともに、八幡宮の祭神である八幡大菩薩の本地仏である阿弥陀如来像を安置する阿弥陀堂を建立する。
- ・ 8世宥尊、宝永3年(1706)正月に鐘楼の鐘を鑄造する。
- ・ 20世潮元は、安政5年(1858)11月に8世宥尊が再建した八幡宮を再々建するとともに、その宥尊が建立した阿弥陀堂を修復する。

須影共同基地内蓮華寺住職墓所配置図



第5章 明治以降の須影八幡宮

1 蓮華寺の廃寺と須影八幡宮の独立

慶應4年(1868)3月、明治政府は、王政復古、祭政一致のため、神道国教化の方針を採用し、神仏習合を禁止するため、神仏分離令を発し、①神社と寺院を分離独立させること、②神社に奉仕していた僧侶は還俗させるとともに、③仏像を神体とすることを禁止し、神社からの仏像・仏具の追放を命じた。

この神仏分離令により、平安時代以来の神仏習合の伝統が破壊され、神社内の鎮守神の分離独立、八幡大菩薩・熊野大権現などの習合神からの菩薩・権現の號の剥奪が行われた。

同年の4月には、早くも、岩清水八幡宮においては祭神を「八幡大菩薩」から「八幡大神」に変更している。

神仏混淆政策により、社職より上位に立った僧職に管理されていた須影八幡宮も、神社管理者となっていた別当、社僧(神社を司る僧)は廃するとの神仏分離令の発布により、蓮華寺20世潮元和尚を最後に、社僧は廃止された。それに伴い、別当寺であった蓮華寺も廃寺となってしまった。

明治5年(小磯家文書によると明治3年)の時であったとある。

それ以後、須影八幡宮においても、神職により神事が行われるようになった。

宇佐神宮縁起に、「八幡大明神筑紫に顕れ、我は是れ日本人皇第十六代誉田天皇広幡八幡なり。我が名は護国靈驗威身神大自在王菩薩と云う」とある。

誉田天皇は誉田別命のことである。

須影八幡宮の祭神も八幡大菩薩から誉田別命（八幡大神）に変わっていった。

この神仏分離令の発布は、平田篤胤の流れをくむ国学を学んだ神官たちの先導もあり、誤った解釈により、全国的に廃物毀釈運動が広がり、多くの寺院が廃寺となるとともに、仏像・仏具・経典が失われていった。

須影八幡宮の別当である蓮華寺等においても例外ではなく、多くの仏像・仏具が紛失していった。

2 上地令による境内地の減少

明治政府は、

- ① 大政奉還及び旧大名の廃絶による幕府から与えられた朱印地及び旧大名から与えられた黒印地・除地・地藏免・薬師免等の消滅
- ② 廃寺に伴う旧境内地の発生
- ③ 廃藩置県により旧大名の所領地を国有化したこととの均衡上、寺社領を国有地化する
- ④ 寺社領を含めたすべての土地に対する免税特権を破棄する

ことを目的として、江戸時代に認められていた寺社領に対し、上地令を明治4年(1871)と8年の2回にわたり発布し、最低限必要な土地以外の土地を公収した。

須影八幡宮も例外ではなく、八幡宮の必要最低限と判断された境内地及び墓所区域を除く、八幡宮・旧蓮華寺朱印地、旧東曜

寺除地、旧蓮華寺地蔵免、及び廃寺された旧蓮華寺・旧東曜寺・旧善生院の境内地が公収され、その結果、八幡宮の境内地は、9 反 6 畝 10 歩（約 9,553 平方メートル）と狭小になるとともに、神社入口部（参道）の両側の地も上地され、参道のみが残るだけとなった。

3 八幡宮境内地の復帰

それを憂いた八幡宮の仮祠掌であつた飯野波江氏は、地元要望の南側参道近辺の 9 畝 13 歩を国から購入し、八幡宮に寄付している。

また、神社裏側の官林として上地された 653 坪の編入についても、内務大臣及び農商務大臣に申請し許可されている。

これらの編入により、須影八幡宮も従来通りの敷地に戻ることもとなった。

4 神社の合祀

明治 39 年(1906)8 月 10 日、明治政府から、合祀によって不要になった境内地は、その合祀した神社等に贈与されるという勅令「神社寺院仏堂跡地譲与に関する件」が発せられた。

いわゆる神社の合併政策のことで、複数の神社の祭神を一つの神社に合祀し、神社数を減らすことであった。

その 8 月 14 日には、内務省は「府県社以下神社ノ総数十九万三千有余中由緒ナキ矮小ノ村社無格社夥キニ居リ其数十八万九千余ニ達シ…」との通知を出している。

いわゆる神社数を減らせとの通知であつた。

空地となった旧神社境内地は、村の土地となるとの言葉につられ、村指導者はこぞって神社等の合祀を行っていった。

須影村も村内にある愛宕社と白山社を八幡宮に合祀していった。

しかしながら、合祀されたものの、地域住民の愛着が強く、愛宕神社は、祭神・迦具土命（旧愛宕大権現）とともに旧耕地に分祀された。また、白山神社も分祀されていないものの、ご神体の一部が、旧耕地に石碑として祀られた。

羽生市内に典型的な合祀の例がある。下手子林の豊武神社である。

明治 22 年(1889)、下手子林村、上手子林村、神戸村、町屋村の 4 村が合併して手子林村が発足した。そして明治 39 年、明治政府から、当該勅令が発せられた。

新しく発足した手子林村も、この勅令にとりつき、新手子林村内に鎮座する神社を合祀し、新しい神社を建立することに決定した。そして村内の 23 社を対等合祀した新しい神社が創建された。日本国が世界に飛躍することを祈り、併せて当地の隆盛を念じて豊武神社と命名された。

豊武神社のように新たに創設された例は少なく、神社歴史を語る上で貴重な神社となった。

なお、須影地区内においても、下川崎村の田中神社は村内の稲荷社・頭殿社・八幡社・天神社・巖島社を、砂山村の愛宕神社は村内の天神社と稲荷社（後に旧地に分祀）を、加羽ヶ崎村の八幡神社は稲荷社を、それぞれ合祀している。

第6章 現在の須影八幡宮

1 祭神

現在の須影八幡宮は、本来の八幡宮に白山神社が合祀されており、それらの神社の祭神である、誉田別命（ほんだわけ）、菊理姫命（くくりひめ）、伊弉諾命（いざなぎのみこと）、伊弉冉命（いざなみのみこと）の4神が合祀されている。

誉田別命は、八幡神社の祭神であった八幡大菩薩が神仏分離により変わった八幡宮の祭神で、応神天皇のことである。

菊理姫命は、合祀された白山神社の祭神である。

また、白山神社とともに合祀された愛宕神社は、現在は分祀され祭神・迦具土命（旧愛宕大権現）とともに旧地にもどっている。



誉田別命



八幡大菩薩騎馬像

2 ご神体

神は、祭事のたびに来訪して人々に祝福をもたらし、祭事が終わると、再び帰っていく。つまり神は神社に常駐しておらず、祭事に降臨する。その時、神霊が寄り付く物が、神社の本殿に安置されているご神体である。

ご神体は神社によって様々で、山、樹木、岩、滝などの自然物をご神体をしているものもあるが、平地に鎮座する神社は、本殿内に、鏡、剣、勾玉、弓、矢、神像、及び御幣などを安置し、ご神体としている。

須影八幡宮のご神体は御幣であるが、ご神体に代わる神像や鏡が多く奉納されている。

3 八幡宮の貴重な社物

① 絵馬

須影八幡宮は、村民はもとより、羽生領全域からも信心篤く、絵馬を始め多くのものが奉納されている。

絵馬とは、祈願または報謝のために、社寺に奉納する絵の額のこと、馬または木馬を奉納する代わりに馬の絵を描いたものが奉納されていたが、次第に馬以外の画題も扱われるようになるとともに、絵師として名のある人を頼むなど、絵画の点からも貴重な絵馬も登場するようになった。

須影八幡宮にも、貴重な絵馬がある。

・源義家と須影八幡宮

合戦模様や武者伝説等は、画題として取り上げやすいところ

から、多くの社寺において絵馬として描かれている。

この絵馬は、八幡宮所縁の源八幡太郎義家が須影八幡宮に立ち寄った姿を描いている。この絵馬には、騎馬姿の義家とともに、頼朝旗掛けの松と馬、そして2羽の鳩と鳥居が描かれている。縦60.2cm、横71cmの大きさの絵馬で、明治28年(1895)8月28日に小林小十郎氏により奉納されたものである。

・ 拝み

小絵馬の中で、最も多い画題が「拝み」である。

祈願する姿を描き、念願成就を願う参拝絵馬である。

『はにゅうの絵馬』によると、「男拝み」には妻の安産を祈り待つことから松の木が描かれていたり、「女拝み」には世継ぎを宿したお礼に赤い提灯と丈夫に生まれることを待つ意味の松の木が描かれたりしているとある。

須影八幡宮にも、多くの「拝み」の絵馬が奉納されている。

・ 繭額

商売繁盛・学問成就・五穀豊穰・子孫繁栄及び技芸上達を祈願した「繭額」で、縦50.5cm、横70.5cmに、繭玉の2個セットを13列12段に配したものである。

明治31年(1898)6月に、奉納されたものである。



繭額

・七福神額

七福神の顔を彫ったものを貼り付けた額である。

なお、須影八幡宮の七福神額は、現在、剥がれ、額と七福神の彫像が別々になっている状況である。

・その他

他に、絵馬そのものの「白馬額」、実際に使用した刀剣を飾る「刀剣額」、通貨を使って八幡の文字を描いた「銭額」、幸福の象徴である鳩を描いた「鳩額」、そして「八幡大神」を描いた額等、多くの絵馬が奉納されている。

② 風刺画

半紙に描かれた風刺画が、20枚保管されている。

製作年代は定かではないが、絵の内容から見て、太平洋戦争終結前に描かれたものと思われる。

ユーモラスなタッチで、当時の世相を表している。



風刺画

③ 御神籤販木

この神社には、羽生市内では珍しい御神籤のセットがある。

34枚の版木があり、版木1枚に3枚の御神籤が彫られ、第一大吉から第一百凶まで合わせて100枚の御神籤となっている。

「第一百凶」と彫られた 34 枚目の版木の余白に、「文久二壬戌年四月吉日作之 蓮華寺 再住潮元代」と、奉納した小礮梶之助以下 16 名の名とともに、「忍行田住 今津平兵衛彫」とあり、文久 2 年(1862)4 月に奉納され、作者は行田の今津平兵衛が彫ったとある。

御神籤は、元三慈恵大師良源上人により創設されたといわれている。慈恵大師が観音菩薩に祈念して偈文(げもん)を授かった観音籤が起源といわれている。



御神籤版木

元三大師は、慈恵大師良源ともいわれ、比叡山延暦寺の中興の祖で、別名「厄除け大師」として名高い。法力によって、疫病を退治しようと必死になって念仏を唱えたところ、あまりに必死になりすぎて、自身が魔物、いわゆる角のはえた恐ろしい鬼になってしまったことから、角大師ともいわれた。

元三大師の御神籤は、大吉・小吉・吉・半吉・末吉・末小吉・凶の 7 種類に分け、運を占った。

須影八幡宮の御神籤は、100 枚あり、大吉・小吉・吉・半吉・前凶後吉・末吉・末小吉・前凶後小吉・凶末吉・凶・大凶の 11 種類となっている。

また、須影八幡宮には、御神籤箱、版木當腰部も一式揃っている。

4 参道施設

① 社号標・幟・幟台

社号標は、神社の入口にある石柱で、かつては社格を入れ「県社 ○○神社」と記していたが、社格が廃止されてからは、単位に神社名のみを表示している。須影八幡宮の社号標も社名のみ「奉納 八幡神社」と刻されており、昭和 57 年(1982)9 月 10 日奉納とある。

幟は、神社の位置を示すもので、神様を誘導する施設である。

須影八幡宮には、「文久三年癸亥八月之吉 須影邸氏子中」と記された幟が保存されている。写真は、文久 3 年(1863)奉納の幟である。



八幡宮の幟

その幟を立てる幟台は、新しく再建され、柱もステレスポールに変わっている。

② 鳥居・注連縄・社額

鳥居は、神社の入口を示す門で、「通り入」（とおりのい）の意と言われている。鳥居に掲げる注連縄は、天照大神が天の岩戸を出た後、二度と入らぬよう注連縄を張った例による、いわゆる「占め縄」の意である。注連縄のある鳥居より内側は神聖なる神の領域ゆえ、穢れのある人（喪中の人等）は鳥居をくぐらず、脇から入る。また、下馬・下車を通例としている。

須影八幡宮には、鳥居が2基あり、一の鳥居は明治31年(1898)に、二の鳥居は平成20年(2008)に、それぞれ建立されている。

一の鳥居に掲げられている八幡神社の社額の「八」の字は鎌倉鶴ヶ岡八幡宮と同様、鳩の形を模した「鳩八幡」となっている。

③ 灯籠・狛犬

灯籠は神様を誘導する施設で、須影八幡宮の大灯籠は明治16年(1883)に、4基の小灯籠は平成26年(2014)に設置されたと刻されている。なお、参道の真ん中は神様の通り道である。

狛犬は魔除けの霊獣で、百獣の王の獅子のことで、高麗から伝来したことから、獅子が高麗犬と言われるようになったという。

須影八幡宮の狛犬は、昭和33年に設置されたもので、作者は加須市の石匠である臺群鴻とある。。

④ 手水舎（てみずや）

参道の脇に、手や口を清めるための手水舎が設置されている。

神は穢れを嫌い、清浄を好むことから、参拝者がその水で、手や口をすすぎ、心身を清めてから参拝する。

伊勢神宮の案内書に「神聖な川、清浄な川として知られる五十鈴川の水で心身を清めてから参宮しましょう。天気の良い日は五十鈴川御手洗場で口と手を清めることをお勧めします。」と書かれている。この御手洗場に代わるものが手水舎である。

須影八幡宮の手水舎に「享保十三年戊申天正月吉日」と刻されたものがある。享保13年(1728)正月に奉納されたもので、古い歴史を持つ手水舎であり、貴重なものである。

5 主な境内社

○ 産泰大神

裏妙義に産泰山(標高 750 メートル)があり、その頂上に産泰大神の石碑がある。

その産泰大神を祀る産泰神社の本社は、前橋市にあり、木花開耶姫命を祭神とする子授け・安産の神社である。

特に利根川沿川の地域に多く分祀されている。

本庄市にある産泰神社では、毎年4月4日の祭りには、参拝者が「子供が安産で生まれますように」と願い、軽く抜ける(生まれる)ようにと、底のないヒシャクを奉納する行事が行われている。

産泰講は、子授け・安産を祈るための女性の講で、一同に集まって飲食を共にして、産泰様に子授け及び安産を願った講である。

当八幡宮における碑は、明治12年3月10日に建立(昭和54年7月再建)されたものである。

江戸末期以降、子授け及び安産を願う女性たちの間で、講が行われるようになり、各所に産泰神社の碑が分祀されるようになった。



産泰神社の被

神社の例大祭の日には、月待塔と同様、女性たちがこの碑の周囲に集まって飲食を共にして、子授け及び安産を願ったとのことである。

○ 庚申塔

中国から伝来した道教に由来する庚申信仰に基づいて建てられた石塔で、庚申講を3年18回続けた記念に建立されるといわれている。

人間の体内には三尸虫、いわゆる三匹の虫がいて、庚申の夜に体内から抜け出し、天帝にその人の悪事を報告し、それにより今後の寿命が決まるという。そのため、庚申の日には、夜通し眠らずに三尸虫が天上へ昇るのを阻止した。

庚申塔には仏教系のものと神道系のものがある。

仏教系…青面金剛（主尊）、蓮（台座）、日輪・月輪（背景）

神道系…猿田彦神（主尊）、雲（台座）、鳥居（背景）

当境内の庚申塔は、「庚申塔」の文字のみの石塔で、土台部に三猿（見ざる・聞かざる・言わざる）が彫られている。

○ 天神社

『新編武蔵風土記稿』に、蓮華寺境内社として、「諏訪社、愛宕社、天神社」が記されていることから、この天神社と思われる。

天神とは、もともとは天の神（雷神）で、日照りの続く時には、天神に祈願すれば必ず雨が降ると言われるように、いわゆる雨乞いの神であったが、流され太宰府で没した菅原道真の怨念が、天神（雷神）となり、京の都を襲ったことから、道真を「天満大自在天神」と神格化し、怨念を鎮めた。

その上、菅原道真が学問に秀でていることから、次第にもとの雷神は忘れ去られ、天神様といえば菅原道真のことで、学問の神様だと変わっていった。

○ 月山神社

月山神社は、山形県月山（標高 1984 メートル）山頂に鎮座する神社で、修験道を中心とした山岳信仰の神である。

神仏混交時には、阿弥陀如来を本尊とし、その本地佛である八幡大菩薩を祭神としていたが、神仏分離後は、月山にちなみ月読命となっている。

かつては、「男は一生に一度は三山に行くもの」といわれ、出羽三山（羽黒山・月山・湯殿山）詣が盛んに行われていた。

この碑もその一つと思われる。

6 境内記念碑等

○ 須影簡易水道竣工記念碑

昭和 32 年 7 月の上新郷及び北荻島において簡易水道が完成したのに次いで、昭和 34 年 4 月、須影にも簡易水道が完成した。

「須影簡易水道竣工記念碑」は、これを記念し須影簡易水道組合により建てられた碑で、昭和 33 年(1958)9 月起工、34 年 1 月竣工と記されている。

南羽生駅前通りの県道沿いに貯水場が設けられていたが、今は整地され、住宅地となっている。

この簡易水道も羽生市水道の普及によりに統合され廃止された。

○ 潮元師碑寄附人名の碑

次ページの「潮元師碑」を建立する際に、協力した寄付者名の碑である。

○ 潮元師碑：故舊門弟建之

境内には、蓮華寺住職であった潮元の寺子屋の碑「潮元師碑」がある。潮元の十七回忌に筆子らによって建てられた。

潮元和尚は、本名を大貫武之といい、須影村の出身で、天保5年(1834)に蓮華寺の18世住職となり同9年に退任、その後、嘉永4年(1851)に住職に再任し、蓮華寺阿弥陀堂を修復するとともに、須影八幡宮を再建造営した。また、法務のかたわら寺子屋を開き、近隣子弟を教授した。明治4年(1871)に没している。享年73歳であった。

潮元師碑

潮元師初稱恵祥後改本名姓大貫氏武之須影邑人也師年甫十二就邑之蓮花寺主潮音者受戒焉天保五年繼法統為住職同九年退隱後嘉永四年因衆推薦再襲前職明治元年以頽齡辭焉同四年九月三十日病寂距生寛政十一年享寿七十三而前後在職廿有三年矣葬法嗣先塋之次師自幼好学老而不倦以法務余暇教授近隣子弟資性敦厚儉而不食嘗捐私財募有志以修理堂宇之頽壞又改築八幡社殿或賑恤邑民貧困者其他美事善行盖不尠云今茲当其十七回忌辰於是故旧門弟等追懷德誼弗措遂協議釀貲以建碑焉嗚呼輓今賦重歛厚民人衣食奔走是不遑当斯秋而有斯舉乃德与望可想見也頃日邑人持状來請誌之予不文何敢当其仁然亦景仰師之德望併感喜有志之慈善者也因弗辭而為之誌

明治二十歲次丁亥嘉平月

北埼玉郡長 正八位 矢野三郎 篆額
行田 楊州古橋寛撰文
北河原 古鼎小林惟精書

第8章 須影八幡宮・蓮華寺に関連する施設

1 旧蓮華寺墓所（須影共同墓地）

須影運動公園（旧須影中学校跡地）南側に、旧蓮華寺の墓地がある。廃寺後における跡地処分表「乍恐以書付奉申上候」には、「式反三畝歩 墓所」と記されている墓所で、廃寺後は神葬祭のもと、須影村において維持管理されていたものの、十分に行き届かず、半ば荒れた状態となっていたことから、昭和40年代から改修機運が高まり、そして平成11年(1999)に、墓所の改修整備が終了した。

そこに立つ「墓地改修記念碑」には、こう記されている。

墓地改修記念碑

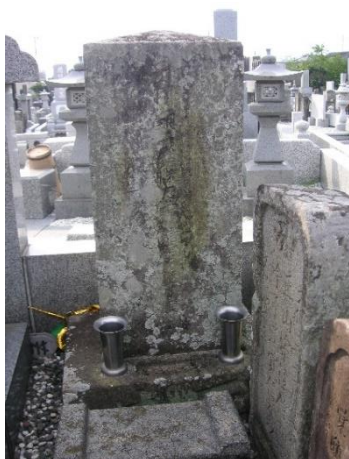
この須影共同墓地は蓮華寺の廃寺跡である 新編武蔵風土記稿によると、真言宗京都智積院の末寺で月光山清浄院と号し開山は 長義上人〔寛永7年(1630年)9月21日示寂〕である明治時代の神仏分離により同5年の廃寺後、神道（神葬祭）に移り以来 墓地役員による管理運営が続いてきたが 昭和40年代から墓地利用者の改修機運のもとで 墓地の整備が実施され今日に至った。また 星霜を重ねてきた歴代住職の墓碑を整え 諸霊の安らかなことを願いつつ 永い間管理運営に携わってきた先人達の努力と墓地利用者の協力に対し 深甚の感謝を表し これを後世に伝えたくここに記念碑を建立する

平成11年3月吉日

今井石材施工

2 武蔵川大治郎墓碑

旧蓮華寺墓地（須影共同墓地）内の平井家墓所には、江戸時代末期に江戸相撲の幕内力士として活躍し、引退後は、七代目年寄武蔵川として相撲会所の組頭（現在の相撲協会理事）等を勤めた須影村出身の関取・武蔵川大治郎の墓碑がある。



武蔵川大治郎墓碑

武蔵川大治郎とは、江戸時代末期の寛政 4 年(1792)に須影村で生まれ、須影八幡宮における勸進相撲で大関（当時は大関が最高位）を張っていたが、文化年間に相撲取りを目指し、糸川部屋に入門、文化 10 年(1813)に荒汐虎之介として初土俵を踏んだ。

翌 11 年に三段目に昇進したのを機に、荒潮大治郎に改名、その後、文政 9 年(1826)には現役のまま、年寄武蔵川を襲名している。翌 10 年に入幕、そして天保 4 年(1833)2 月に引退している。最高位は前頭 3 枚目で、引退後は、7 代目年寄武蔵川として相撲会所の組頭となり、後進の育成に力を注いでいる。

嘉永元年(1848)6 月 22 日に 55 歳で没している。

法名は「狼屋院力蔵晴雲信士」として浅草大乘院に葬られたが、大治郎の「両親の傍に」との遺言により、蓮華寺に分骨された。

その肖像は、江戸時代の浮世絵師歌川豊国により力士画として描かれている。

その墓碑には、正面に「嘉永元年六月二十二日 狼屋院力蔵晴雲信士靈位」と大治郎の没日と法名が、右側面に「武州埼玉郡須影村産ニテ荒潮大治郎名乗ル文政十丁亥武蔵川大治郎改幕乃内ニ上ル年寄組頭役勤ム嘉永元年六月二十二日死ス江戸下谷柳之稲荷大乘寺有之 行年五十五歳 俗名武蔵川大治郎」と大治郎の履歴が、そして左側面に「嘉永五壬子年八月十五日建之 願主荒潮釜次郎 同武蔵川大治郎」と建立日と願主が記されている。

なお、ここの願主は八代目武蔵川大治郎である。

3 愛宕神社

小高い丘の頂に「愛宕大権現」の石宮を祀る祠があり、その石碑には、宝暦 5 年(1755)建立の日が刻されている。

防火の神として信仰を集めている神社である。

かつては、勝軍地蔵を本地仏として祀っていたことから、「武神」



愛宕神社

いわゆる「勝利の神」としても崇拝されている。

特に、この神社が旧須影中学校に隣接していたこともあり、中学校の運動部員から愛された神社で、野球部においては、試合の前には、必ず、ここに祈願して試合に臨んだという。

明治 39 年(1906)に八幡宮に合祀されたが、地域住民の要望により、もとの場所に分祀されている。祭神は、命名を許された「愛宕大権現」となっている。

4 白山神社

白山神社は、石川県の白山に鎮座する白山比咩神社を総本社とする神社で、菊理姫命を主祭神とし、伊弉諾命、伊弉冉命を配神としている。

明治 39 年(1906)に、「神社寺院仏堂跡地譲与に関する勅令」に基づき、須影八幡宮に合祀されたが、身近にも産土神をとの願いから、旧地に石碑が建てられたものと思える

5 須影富士塚

通称「仙元様」といわれている富士塚がある。小高い丘で、頂上には、富士山頂から分祀された「仙元大菩薩」の祠があり、その祠には、正面上に丸に加の文字を記した富士講集団である丸加講の紋章が刻まれている。

富士塚とは、富士山の溶岩や土を母体に富士山に模して築いた塚で、富士講の信者たちにとって、本物の登拝と同じ御利益があるとされ、大いに喜ばれた。

この富士塚の建立年代については、頂上の祠に記載されておらず確かなことはわからないが、建立者の筆頭に「諸井勇吉」の名が記されていることから、勇行の名を受ける前の 19 世紀早々の享和または文化時代の築造と思われる。



須影富士塚

おわりに

平成 24 年度の「須影八幡宮を学ぶ」、25 年度の「須影八幡宮の社物」、29 年度の「須影八幡宮を探る」、令和元年度の「須影八幡宮壁画の話」、そして平成 27 年度の「須影蓮華寺について」と、「須影公民館ふるさと歴史講座」で、須影八幡宮及びその別当である蓮華寺について、お話をしてまいりました。

須影八幡宮は、境内に、源頼朝が奥州征伐の時に立ち寄り戦勝を祈願、その折、旗を掛けた松があるほど古く由緒ある神社であるとともに、惜しくも廃寺となってしまった蓮華寺も、境内に、阿弥陀堂、鐘楼、観音堂、そして檀家寺として東曜寺と善性院を持つ大きな寺院でした。

その廃寺となった跡地も、現在は、小学校、運動公園（旧中学校跡地）、公民館、集会所、そして民地となり、墓地のみが、その面影を留めるのみとなっています。

この須影地区の貴重な文化財の記録を後世に残したく、一冊の小冊誌にまとめてみました。

今後の須影八幡宮を知る上で、少しでも参考になれば幸いです。

最後に、この小冊誌を作成するにあたり、須影八幡宮の氏子役員の皆さん、及び須影公民館職員の皆さん等、多くの方にお世話になりましたことを、この場をかりて御礼申し上げます。

令和 6 年 3 月

間仁田 勝

【主な参考文献】

埼玉県神社庁調査団『埼玉の神社』埼玉県神社庁
三橋健『日本の神々と神社』西東社
羽生市教育委員会編集発行『はにゅうの絵馬』
羽生市教育委員会編集発行『羽生市の文化財』
平井辰雄『羽生ふるさと探訪』羽生市古文書に親しむ会
富田勝治『羽生城と木戸氏』戒光祥出版
埼玉県立博物館『埼玉歴史の道50話』埼玉新聞社
平井辰雄『近世羽生郷土史』羽生市古文書に親しむ会
騎西町史編纂係『騎西町史』騎西町教育委員会

【著者略歴】

間仁田 勝

1944 年生まれ、千葉大学を卒業後、埼玉県職員として奉職。
在職中、『埼玉県行政史第四巻』の執筆に携わる。

2018 年に全国歴史研究会から「歴史大賞功労賞」を受賞、
現在、羽生市文化財保護審議委員、羽生市文化団体連合会理事、
羽生郷土研究会会長。

主な著書に、『埼玉の偉人伝三十人』（私家本）、『読める年表
羽生須影歴史年表』（羽生須影今むかし探究会）、『羽生市の
地名』（同）、『北埼玉地域の歴史遺産』（埼玉県弘済会北埼玉
支部）等がある。

書 名	須影八幡宮を知る
発行日	令和 6 年 3 月
著 者	間仁田 勝
発 行	羽生須影今むかし探究会
